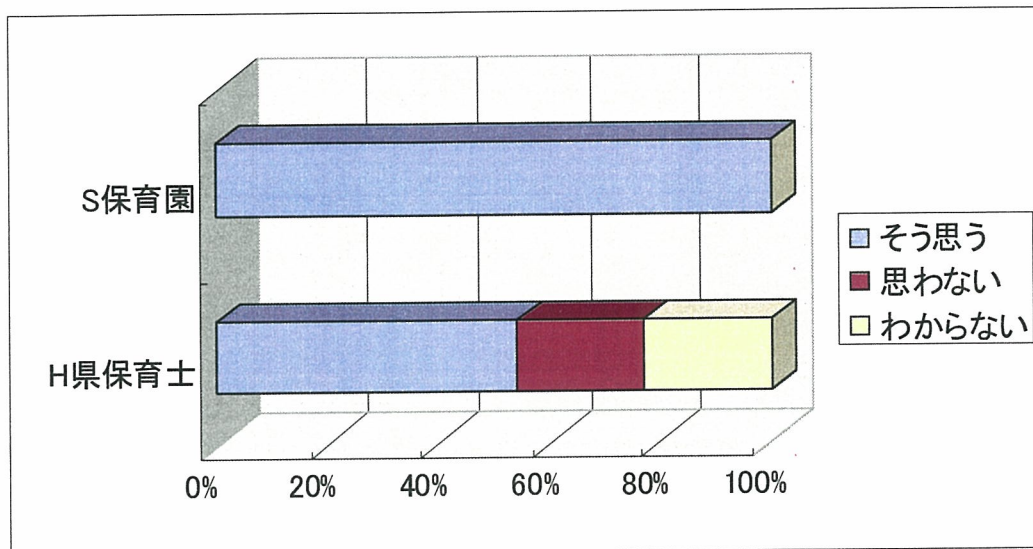
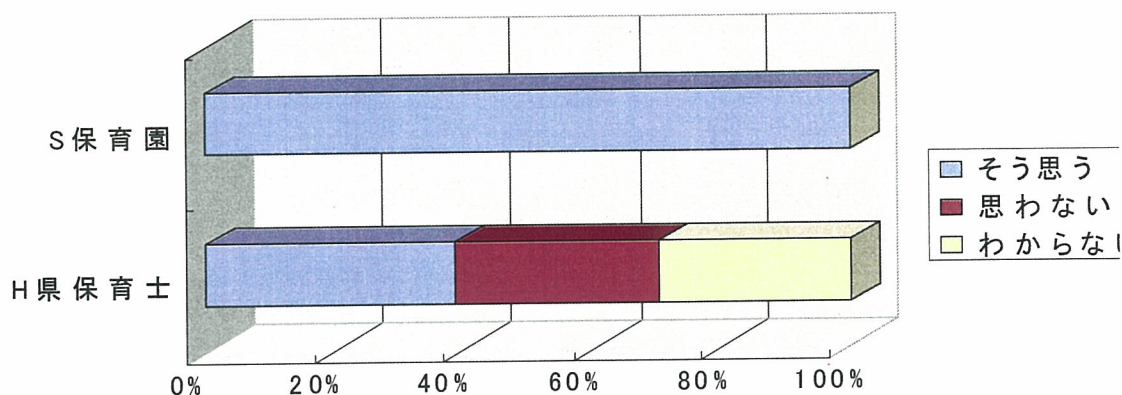


保育士による授業の必要性



S 保育園では、敷設の子育て支援センターの担当者が事前指導の授業の際には、中学校に出向き、「乳幼児の遊びと発達」について、時債の保育場面の VTR を用いて、授業をするということを実施している。また2年前よりこういった授業に加え、保育体験を受け入れるクラスの担任も中学校に出向き、中学生とのグループワークに参加している。中学校での一方的な情報よりも、保育園の子どもの実施に即した話を体験の前に聞くことにより、中学生もより具体的にイメージしやすいものとする。

親となる自覚のために必要



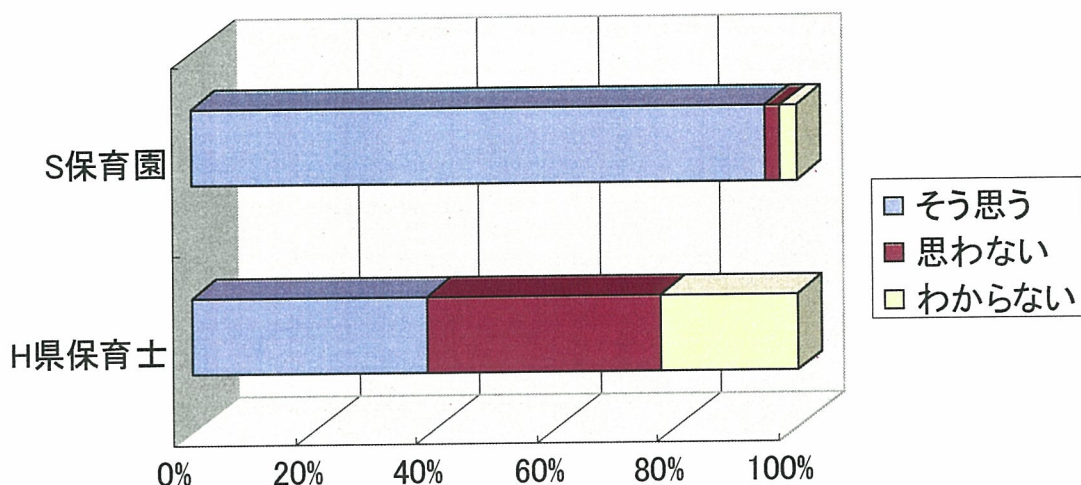
保育体験や子ども体験の意義を、これまでの研究では、おもに主に親になることが比較的間近に迫っている青年期後期を対象とし、その定義も親の役割を果たすための準備性として設定され、すでに形成されている子ども・子育て・親になることに対する意識を構成要素として、それを測るための尺度を用いてきた。しかし、伊藤（2006）によれば、中・高校生の親性準備性、すなわち「今、現在、他の人への受容性と思いやりを備えた個人であるための資質」は、中・高校生が他者と関わる過程でこそ育成される資質だとされる。そのため、中学生においても保育体験に中において他者である幼児との関係性のなかで、「自己を見つめ直し、その過程において自己の資質として他の人への受容性と思いやりを育てていく」（伊藤、2006）ことは、将来親となるための自覚を生む上で貴重な体験となると考える。上記グラフの比較では、一般の保育士において中学生の親準備生に対する意識は高いものとは言えなかった。これについても中学生、乳幼児双方に効果的な体験となるためには、ぜひ考慮しておかなければならない点である。

⑩中学生への理解

S 保育園については、「中学生の行動と心理」に関するパンフレットを保育体験に先立って事前配布し意識の覚醒化を図ったが、それでもなお「もっと知りたい」という声が多かった。これについては次年度より、中学校家庭科担当教員による保育士対象の研修会などが計画されている。保育士が中学校に赴き、子どもの発達について授業するように、中学

校教員が中学生についての講義を保育士するということである。

もっと中学生について知りたい



第5章 研究の総括と今後の課題

「なんとか人生に光が見えた。」驚くなかれ、保育体験を終えた中学生の感想である。教育改革で揺れる教育界であるがこれだけの感想を生徒にいわせるインパクトのある教科や活動が他にあるだろうか。現在、多くの中学校で、あるいは家庭科の授業の中で、あるいは職業体験の一環として取り上げられている保育体験であるが、筆者はむしろ「次世代育成のための先行投資」と積極的にとらえ研究をしている。

保育体験のもたらすもの

止めどを知らない少子化傾向について様々な理由が語られている。若い世代の多くが「子どもを欲しくない」とし、その理由を「子育てが大変」「面倒」「趣味に時間やお金をかけたい」としている。このように話す若者がすでに少子化で育った世代であり、きょうだいはおろか親戚あるいは近隣にも自分より小さい年齢の子どもと触れあう機会は少なかったのである。加えて昨今の「子育て」に関するメディアの伝え方はストレスの軽減や虐待防止ばかりが強調され、子育ての楽しさや面白さを伝えることが少ないときている。保育体験はこのような環境で育った児童生徒にいつの時代でもあった乳幼児とのふれあい経験を回復させようとする試みに他ならない。これを通じて、子どもを、あるいは子育てを肯定的にとらえ、将来の親への自覚も生まれればこれに越したことはないのである。

中学校の保育体験の実情

いいこと尽くめの「中学生の保育体験」のようであるが実施に当たっては課題もある。筆者の調査では、対象とした中学校の80%が「保育体験の時間が足りない」とする一方で、受ける側の幼稚園保育所では75%が「もう十分である」としている。幼稚園保育所からは「乳幼児が疲労することがある」「(中学生のかかわりを)見ていてハラハラする」などと意見も散見され、負担感も高いということが本音であろう。調査からは、中学校で行われてきた保育体験実践では、家庭科などの時間でわずかに事前指導を行うことが多く、また保育現場との綿密な連携や準備も無く、定式的な生徒と乳幼児との交流の場に終わってしまう場合も多いことが明らかになった。これは幼稚園保育所側の60%近くが「将来の子育てに役立つ」としてその意義を認めながら、11%が「乳幼児にとってプラスとはならない」としている点にも表れている。「体験」という言葉で、できるだけ生徒の自然な感性に委ねることを重視するあまり、そこには教育的な意図や指導というものと相容れ

ないと考えているのではないか。保育体験をする生徒の多くが、「子どもの見方が変わった」、「再びこのような体験がしたい」といった感想を示し、また乳幼児にとってもプラスな保育体験になるためにも、いまこそ保育体験を明確な教育内容として位置づける必要がある。

保育体験の課題

中学生の保育体験の教育的意義を考えたとき、①生徒への事前・事後の指導、②学校と園などとの連携のとり方、③乳幼児への効果の検証、が必要となろう。これまで保育体験の多くが中学校の主導でなされており、幼稚園保育所はいわば中学生の体験の「場を提供」しているだけではないかという保育者側の失望があるためその効果を実感できないという側面があった。筆者は幼稚園保育所側の積極的なかかわりを促すために中学校家庭科の授業の中で、事前指導として保育士にも保育現場の視点に立った授業を実施してもらった。その結果、保育士の事前指導を受けた中学生は、自分たちの乳幼児期や、子育てという営みに対して具体的な課題意識を持つということが明らかとなった。また保育体験受け入れ側で「中学生がどのように学習するのかわからない」「今の中学生がわからない」という感想が少なからずあり、保育者の中学生理解を深める機会も必要にもなった。このような相互の連携が確立されてこそ、乳幼児への良い影響も生まれるものと確信している。「子育て支援」「次世代育成」は、すぐには効果のある特効薬はない。長期的視点に立った「先行投資」として「中学生の保育体験」が今望まれている。